

□ 書 評 □

「消化管内視鏡ハンドブック」

林

貴 雄

日本大学講師
日本大学板橋病院消化器科科长

旭川医科大学教授

並 木 正 義

知りたいことのすべてが網羅され、必要なことの一切が要領よくまとめられている本というものは、そうめったにあるものではない。ところが今回出版された林貴雄氏の執筆になる「消化管内視鏡ハンドブック」は、まさにこの条件を見事に満たしたユニークな良書といえる。

消化管内視鏡に関する一切のことが、もれなく、微に入り細にわたり、懇切丁寧に、わかりやすく、要点について書かれている。読んでいて深い感銘を受けた。内視鏡を学ぶものにとって、どのようなことが知りたいのか、また知っていなければならぬかということ、これほどまでによく見抜き、よく考えて書かれた本は、これまで見当らない。自から内視鏡の道をきり開き、苦勞し、厳しい修練を積み重ねて今日に至った執筆者にして、はじめて成せる業である。

内視鏡に必要な写真、光学の基礎知識をはじめ、多くの役立つことばかりが、ぬかりなく、細かく、理解しやすく書かれているのには感服し

た。しかも消化管内視鏡だけでなく、腹腔鏡や胆道内視鏡まで、ともかく消化器領域における内視鏡検査のすべてが含まれている。さらに付録として、内視鏡の種類一覧、内視鏡に必要な写真用語、切除標本写真の撮り方や内視鏡フィルムからのスライド作製の技術、それに早期胃癌や食道癌その他の病変分類といった病理学的事項など、ともかくこの本が1冊あれば、消化管内視鏡に関連したことなら、なんでもわかるといった字引きの重宝さをもそなえている。最も感心した点は、豊富にもられた、たくみな図解である。これは実にうまく、わかりやすく、要を得ている。直視下生検の仕方、要領、その後の検体の取り扱いなど親切をきわめている。そこには執筆者の熱意と人間性があふれている。これから内視鏡を始める医師、研修医、およびパラメディカルスタッフや臨床実習の学生には、どんなにか役立つことであろう。それだけでなく、すでに内視鏡の経験をかなり積んだひと、さらに内視鏡を指導する立場に

あるひともし是非ごらんいただきたい。内視鏡の経験が深ければ深いほど、書かれている内容に頷く点が多いであろうし、なるほどこのように教えれば理解しやすく、またこの図解を示せば確かに初心者でもよくわかるはずだと思われるすぐれたシェーマが随所に出てくる。大学で内視鏡を教えている教官にとってもきつと役立つものと思う。

この本を手にしたとき、瞬間どうしてもっとがっちりした表紙にできなかったのかと思ったが、軽く曲げると白衣のポケットに入ることがわかり、なるほどと思った。つまり、いつでも身近においておくべき本はこのほうがよいわけで、こういった細かい点まで配慮されているのにあらためて感服した。気楽に読めて、しかも自然のうちに知識が身につくといった最近の傑作ともいえるべき本であり、内視鏡を学ぶすべてのひとには是非一読することをすすめたい。

A 5 頁218 図142 原色図29 1979
¥ 3,200 ㊦ 200 <医学書院刊>